

## 元青少年交換学生アシュリー・カイモウィツが遺したものの THE ROTARIAN の記事全文

アシュリー・カイモウィツさんが、住まいのあるケープタウン近郊の裕福な住宅地からほんの数マイル離れたところで残虐行為が起こっていることを知ったのは、まだ 16 歳のころ。シーポイントロータリークラブ (RC) がスポンサーを務めているヘルツェリア高校インターアクトクラブの幹事として、クラブの仲間とナンセバ・ファミリー・カウンセリングセンターに招かれたときのことで、そこは、暴行犯罪の被害者である子どもたちを保護している施設で、地元のカウエ・マンカイ氏が地域社会の中で児童暴行に立ち向かうために、1998 年に創立したものです。

マンカイ氏は、貧困者居住地の中心にある一部屋しかないレンガ造りの建物で、カウンセリングセンターを運営しています。それはケープタウン大学から月決めで借りているもので、もっぱら民間部門や大学からの寄付で、運営されています。しかし、ときどきセンターのボランティアたちが自分たちの蓄えから、お金を出すこともあります。ナンセバは、これまでにその地域に創立された、性的暴行や虐待を受けた子どもたちのための、唯一の緊急センターなのです。

毎日、マンカイ氏とボランティアたちは、その地域の、最も貧しい子どもたちにかゆや、手に入れることのできた食べ物はなんでも与えています。子どもたちにとっては、それがその日の唯一の食べ物になることもよくあります。また、子どもたちに危険が及ばないように監視された遊び場もあります。そこにはタイヤのブランコがぶらさがった、錆びたジャングルジムがあります。彼らは、ドアを開けてやってくる被害児一人ひとりのために、カウンセリングや病院への搬送手配、報告書の作成も行っています。センターは、薄汚れて人手も不足していますが、カエリチャの貧しい子どもたちにとって、唯一安心できる天国なのです。

カイモウィツさんが所属するインターアクトクラブは、ナンセバの主要な資金調達者であるヘーゼル・ブラック氏によって、センターに招待されました。ブラック氏は、被害を受けた子どもたちが直面する問題に対する感心がインターアクトたちの中で高まるよう、その訪問を計画しました。

ある日の午後、カイモウィツさんは、自分とその仲間でいっぱいになった小さな部屋で、センターが資金も人手も必要としているというマンカイ氏の説明を聞いていました。そのときカイモウィツさんは、部屋の向こう側の壁際にあるベンチにうずくまっている女の子に目を奪われました。マンカイ氏の説明によると、その女の子はまだ 4 歳で、前夜、父親に性的暴行を受けたとのことでした。

「私がかがみこんで両手を広げると、その女の子は私を見て、私の胸の中に飛び込んできました。私は感情をおさえきれずに泣き出してしまいました。その瞬間、この地球上での私の使命は、この現状を変えること以外ない、と思ったのです」と彼女は、友人と家族にメールで伝えました。

その帰り道の車の中で、カイモウィツさんはあの女の子を頭から追い払うことができませんでした。しかし自分に何ができるのか、と彼女は思いました。彼女はどこにでもいるティーンエイジャーで、バスケットボールとコーヒーを飲みながら友達と話すのが好きな、高校生にすぎなかったのです。

「センターから帰ってきたときのアシュリーの怒りといったら、"お母さん、私、ノカウエさんがしていることを映画にして、児童暴行に対する意識を目覚めさせようと思うの。そして、もっといいセンターを建てるために、寄付金を募るつもり" と娘は話していました。私は半信半疑で"いいわよ、アシュ"と言ったのです」と、母親のミーガンさんは話します。

そして、カイモウィツさんは、南アフリカの貧困者居住地での暴行を描いたドキュメンタリー映画の製作に情熱を注ぎ込むと同時に、新しいセンターのための資金集めの道具として、その映画を積極的に使うことを決めました。機材も経験もなくそのプロジェクトに飛び込んだと、彼女の母親はふり返りません。彼女は支援を求める手紙を書き、アメリカの友人家族から 1,000 米ドルを小切手で受け取りました。

資金を手にして、彼女は学校の友人であるレクシー・アロンソン、ジャエ・ブラウン、シャニ・ジュデスを仲間として招き入れました

「アシュレイはこのことを映画にするといいました。そして、土曜日の朝7時に僕を起こして"準備して。カエリチャに行くわよ"と言ったのです。ちょっと待てよ、僕たちはカメラすらもっていないじゃないか、という感じでした」とブラウンさんは言います。

南アフリカの撮影機具レンタル会社であるマガス・ビジュアル社のオーナーは、彼女に会ってその考えを聞くと、必要なものをすべて貸すことに同意しました。

機材と撮影クルー、そして彼女の両親が雇った警備員とともに、彼女は突進しました。「アシュレイが貧困者居住地に行くことに多少の心配があったので、彼女に警備員をつけました。後で必要なかったと分かったのですが、彼女は、カエリチャで経験したような、あれほど温かく家庭的な雰囲気を含めて今まで経験したことがないと、話していました」と彼女の母親は言います。

カイモウィツさんは書いています。「創案から完成まで、映画をつくるのに4か月かかりました。睡眠もとらず頭の中で構成を考え、台本を書き、アイデアを広げるために主に事務所としていた所から図書館へと走り、座る間もなく、勉強とバスケットボールの練習に後れをとらないよう必死の努力をしたこと、そのときに感じたことすべてを覚えています。母親は、私自身が学業の心配をしていた以上に、映画が完成する前に私が入院するのではないかと、心配していたと思います」

カイモウィツさんと友人たちは、カエリチャを撮影するために、そこで何日間か過ごしました。「そこは生活環境がまるで違っていました」とブラウンさんは言います。「ハエがたかった肉が太陽にさらされて、置いてあるのです。しかし、活気にあふれ、好ましいのです」

カイモウィツさんは10時間分もの場面を撮影し、彼女とアロンソンさんに映画編集の基本を教えてくれると申し出てくれた、専門の映画編集会社にそのフィルムをもって行きました。スタジオのスタッフは、そのプロジェクトに大変感動して、1セントも請求することなく教えてくれました。

「彼女の情熱が伝染したのです」とブラウンさんはふり返ります。

2002年、24分間の映画"UthandoLabatwana - すべての子どもたちのために"が、インターアクターの仲間たちを含む200人近い観客を前にして、カイモウィツさんの高校の講堂で初上映されました。そして、スタンディングオベーションを受けたのです。

「完成した映画を初めて見たとき、すごいと思いました。アシュリーは何が起きているかを見て、地域社会全体を触発するやり方で表現することができたのです。寄付金がどんどん集まり始めました」とブラウンさんは言います。

それ以来、"UthandoLabatwana"は南アフリカ中の高校やロータリークラブで上映されてきました。2004年にカイモウィツさんはロータリー青少年交換学生として日本に行きましたが、そこでも映画祭で上映されました。

「娘が行動を開始したとき言いました。"お母さん、これは単なる資金集めではないの。認識を高めることが目的なの"と。これまでにどれだけ多くの人が、カエリチャの話聞いたかを知ったら、娘は誇りに思ったことでしょう」と彼女の母親のミーガンさんは言います。

その映画は、南アフリカの西ケープ州で制作されたメディア作品に贈られる栄えあるストーン賞をはじめ、数々の賞を受賞しました。カイモウィツさんの才能も認められ、キャンベラにあるオーストラリア国立大学からデジタルアートを勉強するための奨学金を受けることになりました。

しかし、2005年3月、オーストラリアに旅立つ数週間前、映画の将来についての会合から家に帰る途中、19歳だったカイモウィツさんのクルマは、飲酒運転をしていたドライバーのクルマに激突されました。彼女は即死でした。

「私にとって、人生最悪の瞬間です」。玄関のドアを開けると、娘の死を伝えるために二人の警察官が立っていたその夜のことを思い出しながら、彼女の母親は語ります。「しかし、アシュリーの輝きは映画を通して今なお健在で、人々がより良い人生を送れるようになってきたのです」。

カイモウィツさんの日本での青少年交換学生のスポンサーであったホートベイRCは、ほかのロータリークラブとともに、アシュリー・カイモウィツ記念基金を創設しました。性的暴行の被害児に貢献したカイモウィツさんをたたえ、ナンセバ・ファミリー・カウンセリングセンターへの寄付金を管理し集めています。

彼女が亡くなった後、カイモウィツさんの物語と映画が南アフリカのテレビでたびたび取り上げられました。人気情報番組"カーテ・ブランチェ"でも、特集を組んで彼女の生き方を放送しました。NHKでもカイモウィツさんのドキュメンタリー番組を放送しました。ナンセバ・ファミリー・カウンセリングセンターは、直接の寄付金で500万ランド(72万9,150米ドル、約8,600万円)を受け取りました。そしてロータリアンが管理する記念基金は16万ランド(2万3,300米ドル、約270万円)以上になりました。寮や診療所、法律やカウンセリングのオフィス、コミュニティーセンターを完備したセンターの再建が数か月で始まります。子どもたちを病院や警察署に連れて行くためのクルマも購入される予定です。カイモウィツさんにちなんで名づけられたセンターの棟には、彼女をしのんで、著名な南アフリカの芸術家の彫刻を飾る予定です。

「彼女がここに来たときに、あの少女がしたことは、ほかの子どもたちのために彼女の心を開くことだったのです。彼女がここに来たことを、神に感謝します。ここにいる若い少女たちは彼女に会うことはありませんが、彼女の名前を忘れることはないでしょう」とマンカイ氏は話します。